

曲亭馬琴『殺生石後日怪談』の生成

——〈殷周革命説話〉の構想を軸に——

三 宅 宏 幸

一 問題の所在

『殺生石後日怪談』(文政七「一八二四」—天保四「一八三三」年刊、以下『殺生石』と略す)は、曲亭馬琴の長編合巻に位置づけられる作品である。鎌倉時代を物語背景にとり、謡曲「殺生石」でおなじみの、妖狐が那須野の原で討たれ、その魂が巨石に取り憑いて殺生石となった、という話の後日譚として物語が展開していく。本作は長編合巻に分類されるが、馬琴の殿村篠斎宛書翰には『殺生石』は、四ヶ年已前之拙作にて、一昨年之冬、中本にて出版、それヲ昨年之冬、合巻にいたし候古板にて御座候(文政八年正月二十六日付、傍線論者。以下同)とあり、一度は中本型読本として出版されたらしい。ただし高木元「末期の中本型読本——いわゆる〈切附本〉について——」⁽³⁾によると、中本型読本形態の『殺生石』の所在は確認されていないようである。また、本作を単に合巻と断定し難い理由に形式の問題がある。合巻は通常、絵と文とが共存する絵画小説であるが、本作は比較的大きな字によって文のみが記される丁と、文字も含んだ挿絵の丁とが配され、読本と合巻とを折衷したような体裁で刊行された。⁽⁴⁾馬琴自身も『殺生石』の序に「よみ本と合巻の冊子の間の狂言綺語」(二編序)と書き、⁽⁵⁾新形式での作品著述を試みたものの、「作者の筭盤ちがひよりよみ本合巻兼案の徳用向となりたり」(四編序)ともあるように、馬琴が当初期待したような結果は得られなかつ

た。このような新形式の失敗、さらに馬琴が書肆との軋轢によって本作の執筆に乗り気でなかったこともあってか、現状、『殺生石』を単体で取り上げた論考は少ない。⁷⁾

その中で、『殺生石』研究の基礎となる論考が、『殺生石』と中国白話小説『封神演義』(作者不明、全百回)との関連を指摘した麻生磯次「洒落本・草双紙・人情本に於ける影響」⁸⁾である。麻生論考の指摘は水野稔諸論考でも採用されており、『殺生石』の研究を行う上で必読の論文といえる。本稿における論の進行上でも重要なため、少々長い煩を厭わず該箇所を以下に引用する。

殺生石後日怪談は封神伝の影響を受けてゐる。先づ¹⁾美女を天下に求めるといふ一段であるが、紂王は後宮に数多の美女を擁しながら尚天下に遍く美女を求め、終に妲己を得て、その身を亡すのであるが、源頼家の場合も同様であつて、丹会法橋をして諸国を遍歴せしめ、紫の方を手に入れるのである。次は²⁾狐の靈にとりつかれる段であるが、紫の方には九尾の狐の悪霊がとりつき、その性格を残忍非道なものにかへ、頼家をたぶらかし、その命を奪ふに至る。これを封神伝に徴するに、蘇護の娘妲己は上京の途次恩州駅の廳堂に一拍したが、その夜千年の狐狸の精が現れて、妲己の魂魄を吸去り、その體を借りて形を成し、紂王の寵を得て、これを亡すに至るのである。³⁾寵を競ひ相手を排撃する一段も似てゐる。紫の方は二色の方を失はうとして、悪臣と通謀し、呪詛の冤罪を負はせて自滅させるのであるが、妲己も悪臣費仲・尤渾等と計つて皇后姜氏に大逆無道の罪名を被せ、むごたらしく殺害するのである。⁴⁾震雷の間に赤子を拾ひ取る一段も両者同様である。上総太郎廣嗣は雷鳴の間に赤児の悲鳴を聞き、柩の中からこれを拾ひ取るのであるが、西伯侯姬昌(文王)も雷雨のあとで、古墓の傍に一孩子を拾ふことになつてゐる。

以上の麻生論考の記述をまとめると、次の四点、すなわち、1「美女を天下に求める」点、2「狐の靈にとりつかれる」点、3「寵を競ひ相手を排撃する」点、4「震雷の間に赤子を拾ひ取る」点を、『殺生石』と『封神演義』との共通点として抽出した。これらの共通点については論者も確認したが、首肯できる指摘である。

しかしながら、問題は、これらの共通点をあげつつも、麻生論考の結論は「大體の趣向を学んだだけでその関係は緊密とはいへないが、殺生石の製作に際し封神伝が参照されたことは否定ができない」と締めくくられる。両書間の関係に自信がありながらも、あえてこのような書き方をしたのかもしれないが、「大體の趣向を学んだだけでその関係は緊密とはいへない」という文言からは、『封神演義』の影響についてやや消極的な印象を受ける。

『殺生石』刊行時の馬琴と『封神演義』との関係を考えるに、文政三年刊の馬琴の考証随筆『玄同放言』卷之三上「宋陳彭年綽号」には、「鍾伯敬が批評せし。封神演義は、全部十六卷。題目九十九回。紂王女媧宮進香といふに起りて。周天子分封列国といふに尽。康熙乙亥午月。長洲楮人獲字稼「割註」号四雪堂。」が序あり。この演義小説は、九尾の狐。形を変じて。姐己になるといふ事を面目にして。作設たり。」という記述があり、馬琴が『殺生石』執筆以前に『封神演義』を見ていたことは間違いない。そもそも、『殺生石』初編序に、「石を鞭て羊となせし。道士の杖。狐を射ては。石と奈須野の勇士の鏃。其は唐土の列仙伝。山海経に封神演義。これは天朝の下学集。実事歟。虚詭歟。昔より。こゝに伝へて三国妖狐のことふりにたる怪談を。種に後日の殺生石竹。」と、『封神演義』の書名が明記されていることから、『殺生石』に『封神演義』を利用してると認めて良いのではないか。当時、写本だけでなく版本でも流布していた姐己——褒姒——玉藻の前と連なる三国の妖狐の系譜を踏まえれば、謡曲「殺生石」の後日譚である物語に、姐己が登場する『封神演義』を用いることは至極当然のことであつたといえる。

さらにいえば、文政から天保年間にかけて馬琴の長編合巻執筆は増えるのであるが、その構想は左に列挙することく白話小説や通俗軍談など中国小説に基づく作品が多い。

刊行年

長編合巻

藍本

○文政7

『金比羅船利生纜』

『西遊記』

○文政8

『傾城水滸伝』

『水滸伝』

○文政12

『風俗金魚伝』

『金翹伝』

○文政12) — 『漢楚賽擬選軍談』 — 『通俗漢楚軍談』

○天保2) — 『新編金瓶梅』 — 『金瓶梅』

にもかかわらず、麻生論考が「その関係は緊密とはいへない」としたのはなぜか。愚考すれば、この時期の他の長編合巻と異なり、『殺生石』と『封神演義』とで共通する四点全てが物語序盤（いずれも『殺生石』初編内）の趣向であるため、作品全体を包む構想が『封神演義』で貫かれていないということが理由かもしれない。だが、馬琴は『殺生石』や合巻『風俗金魚伝』について触れた篠斎宛書翰（文政十二年二月十一日付）の中で、「唐山小説の訳文とのミ御見なしなき様ニ奉希候」と、『殺生石』が単純な中国小説の翻案ではないと主張している。このことは逆説的に、馬琴が『殺生石』の全体構想を「唐山小説」に基づき、工夫を加えたことを認めたと解しうる。とすれば、『殺生石』のテクスト生成過程における工夫に、『封神演義』との関連を確定するに至らせなかった要因があるのではないだろうか。

本稿は、『封神演義』に拠ったとされる『殺生石』の構想や趣向を再検証することで、『殺生石』の生成過程を改めて捉え直し、馬琴が施した工夫を炙り出すことを目的とする。

二 『殺生石』の構想と〈殷周革命説話〉

まず、麻生論考が『殺生石』と『封神演義』との関係を「緊密とはいへない」と結論づけた原因を探る。前述したように、『殺生石』の序には『封神演義』の書名が記され、『封神演義』が典拠の一つであることを読者に明示しているにもかかわらず、麻生論考が両書の強い関連を認めないのは、美女を求める点や九尾の狐が取り憑く点など、『封神演義』冒頭の場面しか共通しないことが要因ではないかと論者は推察する。というのも、『殺生石』と『封神演義』とは、決定的な差異が存在する。それが、『殺生石』の一番丸、『封神演義』の殷郊の設定である。それぞれ、源頼家の落とし胤、殷の紂王の息子であり、「為政者の嫡子」という点で二人は共通する。二人の両書における設定の差異を明確

にすること、『殺生石』の構想に馬琴の誤解が関わることをわかる。まずは、そのことを押さえておく。

『封神演義』は中国古代、殷の紂王が妲己と共に様々な悪政を布き、反感を抱いた民衆が周の文王・武王父子を擁立して殷王朝を滅ぼす、いわゆる〈殷周革命〉を題材とした作品である。馬琴が閲読した〈殷周革命〉を素材とした中国小説は『封神演義』だけではない。通俗軍談『通俗武王軍談』（別名『通俗列国志前編』、清地以立作、宝永二〔一七〇五〕年刊）がある。馬琴と『通俗武王軍談』との関わりは早く、寛政十三〔一八〇一〕年には『通俗武王軍談』を底本にして『画本武王軍談』を著す。『画本武王軍談』と『通俗武王軍談』それぞれの書き始めを比較すると、左記の通りである。

<p>『画本武王軍談』</p> <p>商の湯王<small>たみかう</small>、なんそうに桀<small>けつ</small>をほろぼしてより六百四十年、二十八代のみかどを殷<small>いん</small>の紂王<small>ちゆうわう</small>といふ。紂王<small>ちゆうわう</small>、名<small>な</small>は受辛<small>じゆしん</small>。すなはち帝乙<small>ていいつ</small>の末子<small>ぼつし</small>なり。</p> <p style="text-align: right;">（巻之一）</p>	<p>『通俗武王軍談』</p> <p>殷<small>イ</small>ノ湯王<small>タウ</small>出<small>デ</small>テ南巢<small>ナンサウ</small>ニ桀<small>ケツ</small>ヲ放<small>ハナチ</small>テ生民<small>セイミン</small>ヲ救<small>ス</small>フ。相承<small>アヒカ</small>ル事六百四十載<small>サイ</small>、二十八代<small>チウ</small>紂王<small>チウ</small>ニ至<small>シ</small>ル。紂王<small>チウ</small>名<small>ナ</small>ハ受辛<small>ジウシン</small>。帝乙<small>テイイツ</small>ノ末子<small>ボツシ</small>ナリ。朝歌<small>テウカ</small>ト云<small>イハ</small>コロニ都<small>ミヤコ</small>シテ国<small>クニ</small>ヲ商<small>シヨウ</small>。</p> <p style="text-align: right;">〔割註〕或ハ殷「ト号」。</p> <p style="text-align: right;">（巻之一）</p>
--	--

冒頭の「商」と「殷」とで王朝名が異なるものの、『通俗武王軍談』には二つが同じ王朝を表すことも続けて記されており、特に問題はない。両書の書名の類似に加え、文辞がほぼ一致することを見ても、『画本武王軍談』が『通俗武王軍談』を下敷きにしたことは認めて良い。なお、『封神演義』第一回冒頭では、紂王を湯王から数えて「三十一世」の王としている。このことから、『画本武王軍談』が『封神演義』を粉本とした可能性は低いと考えられよう。

さて、馬琴は書翰に『封神演義』ハ先年かい取、暫所蔵致候得ども、久敷事故、具に覚不申候へども、「玉藻前」「三国狐伝」之本家にて、是も大筆ニあらざるにあらず候。」（天保十一年八月二十一日付篠斎宛〔路女代筆〕）と述べてはいるものの、『封神演義』を初めて閲したのがいつ頃であるかは判然としない。しかしこれまでの研究で、馬琴が

『封神演義』を早い時期から見ていると考えられてきたのは、中編読本『昔語質屋庫』(文化七「二八一〇」年刊)や考証随筆『燕石雜志』(文化八年刊)等の記述が理由とらしい。例として、『燕石雜志』巻之一「九 恠刀祢 九尾附」の「九尾の狐」についての記述を以下に示す。¹⁵⁾

○唐山演義の書に、九尾の老狐化して姁妃となり、紂王を盡惑せしよしを作りしかば、こゝにも好事のものありて、近衛帝の宮嬪玉藻前といふ狐妖を作り出せしは、謡曲の滑稽なるが、何人か序あやしう綴りなして、三国伝来の怪談なりぬ。¹⁶⁾ (巻之一)

先行研究ではこの「唐山演義の書」こそ「演義」の書物、つまり『封神演義』と推測した。¹⁶⁾ だが、ここで誤解してはいけないのは、馬琴にとっての「演義」とは単に書名の一部を取り上げるものではない。例えば、『燕石雜志』執筆と同期の長編読本『椿説弓張月』(文化四―同八年刊)後編「批為朝外伝弓張月」に「余嘗羅氏が三国志、及十二朝、武王、漢楚、隋史遺文、玄宗、五代史、岳飛、元明、国姓爺等の諸演義を閲するに、変化の奇、宛転の妙、虚実相半せり。」とある。¹⁷⁾ この文言は「魁蕾子」という門弟に扮した馬琴が自ら『弓張月』を批評した箇所の一部であるが、ここに様々な中国小説の書名がある。一つ一つ見ていくと、「三国志」が『通俗三国志』(元禄五「一六九二」年刊)あるいは華本の『三国志演義』(馬琴の蔵書に華本『三国志演義』があり、「羅氏が」と記すことから)、ここでは華本の方を指すと考えて良いだろう)、「十二朝」は『通俗十二朝軍談』(正徳二「一七一一」年刊)、「漢楚」は『通俗漢楚軍談』(元禄八年刊)、「玄宗」は『通俗唐玄宗軍談』(宝永二年刊)、「元明」も『通俗元明軍談』(宝永二年刊)、「国姓爺」は『明清軍談国姓爺忠義伝』(享保二「一七一七」年刊)のように、主に中国講史小説を翻訳した通俗軍談が列挙された想定できる。日本古典文学大系60『椿説弓張月』の頭注(後藤丹治校注)は、それぞれ通俗軍談の基となった華本の書名をあげているが、書名をわざわざ変更するのは不自然であり、通俗軍談の書名の一部を抜粋したものと考えるのが妥当であろう。とすれば、「武王」とは『通俗武王軍談』を指し、それら通俗軍談も「諸演義」なのである。要するに、馬琴の述べるところの「唐山演義」とは、通俗軍談——漢字カタカナ交じりの日本語に翻訳されたもの——も

含まれており、必ずしも「演義」を冠した華本だけが馬琴にとつての「演義」ではない。

ここで馬琴の誤解に着目したい。『玄同放言』に、「一周の褒姒を。殷の妲己に作りかへしは。後人の所為にして。通俗武王軍談に縁れるなるべし。原彼武王軍談に。武王克殷、王天下までの事は。封神演義の訳文なり。」とある。続けて「通俗武王軍談の原本は、亦是一本なり。」とも記しており、つまり、『殺生石』執筆の直前における考証では、「通俗武王軍談」は『封神演義』の「訳文」である、というのが馬琴の認識であった。しかし、『封神演義』と『通俗武王軍談』とは異なる小説である。二階堂善弘「封神演義の成立」によると、『通俗武王軍談』は『春秋列国志伝』前編を和訳したもので、『封神演義』はその『春秋列国志伝』前編と元代に成立した『武王伐紂平話』とを基にした白話小説である。つまり、『封神演義』と『通俗武王軍談』とは異なる書物だが、馬琴はそのことに気付かず、誤解して『通俗武王軍談』を『封神演義』の「訳文」と考証随筆『玄同放言』に記したわけである。このことを踏まえると、『燕石雜志』や『昔語質屋庫』執筆時に馬琴が『封神演義』を目にしていたとは考えにくい。前述した『弓張月』の記述を見ても、華本である『隋史遺文』の書名は記しているが『封神演義』の書名はない。『玄同放言』のように『通俗武王軍談』を『封神演義』の「訳文」と考えるのであれば、ここでは『封神演義』の書名を記すのではないだろうか。

馬琴の随筆及び二階堂論考の記述を踏まえて、論者が私に当該書物群の相關関係をまとめた(表1)。「封神演義」と『通俗武王軍談』とは同じ殷周革命に取材する点で共通し、内容も近いものの、『封神演義』は『春秋列国志伝』だけでなく他の小説要素や新たな要素も加えて制作されたため、設定が異なる箇所もある。『封神演義』の神話的要素やSFを思わせる神具(宝貝)の存在もその一つであるが、本稿のテーマである『殺生石』との関連上で重要な差異が、先に触れたように、紂王

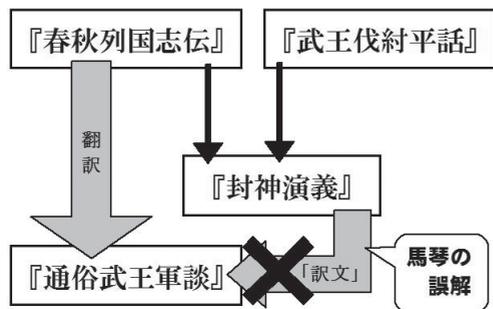


表1 〈殷周革命〉関連書関係図



図版1 『殺生石』五編上 (38ウ・39才) (国文学研究資料館蔵)

の嫡子股郊の設定である。

両書における股郊の差異については、これも二階堂善弘「戦う神々の由来」⁽²²⁾が的確に指摘する。「気の毒なのは股郊で、『捜神大全』『伐紂平話』などどんな資料を見ても、彼は武王を助けて股を伐つはずなのに、『封神演義』では逆に周を裏切って悲惨な最期を遂げるようになってしまった」とあるように、『通俗武王軍談』における股郊は様々な戦いで活躍して、母の仇である妲己を討つ役割を担うが、『封神演義』の股郊は申公豹に唆された結果周を裏切り、戦いに敗れて処刑される。

両書のこの違いを念頭に置き、『殺生石』のクライマックスを見てみよう。『殺生石』では、九尾の狐が憑いた紫の方を、好色な為政者頼家と貞淑な正室二色の方との間に生まれ

た一幡丸が討つ (図版1)。

一幡丸は高やかに唱ふる念彼観音力の冥助を仰ぐ英雄の利剣の刃に、紫は腰のつがいを斬り放されて、臀居に墮と転びつゝ、起んとするを置鬼けて撃つ。一幡の修練の太刀風煌めく俛に、紫が首は前にぞ落ちにける。時に怪しや紫の傷口よりして一道の心火忽然と現れ出で、那須野を指して飛び去りけり。是なん彼の野の九尾の狐の悪霊、彼の身にまつはりて、年来種々の悪虐を行はせしものならんとて、人皆始めて悟りける。

(五編上／三十八才)



図版2 『画本武王軍談』三 (22才)
(国立国会図書館蔵)

一幡丸が親の仇である紫の方の首を落とすと、彼女に取り憑いていた殺生石の九尾の妖狐が現れ、それを見た人々が、これまでの悪虐無道はこの妖狐が行っていたと悟る展開となっている。

『通俗武王軍談』も同様である。好色な為政者である紂王と貞淑な正室姜皇后との間に生まれた嫡子の殷郊が、太公望の助力を受けながら、九尾の妖狐が取り憑いた姐己を倒す。

太公望ガ日、「我聞。姐己ハ妖怪ノモノナリ。カナラズ其本相ヲ形シテ後、之ヲ除ベシ。」トテ、左右ニオホセテ照魔ノ寶鏡ヲ懸テコレヲ鑑セシムルニ、姐己スナハチ其本相ヲ露ヲ見ルニ、九尾金毛ノ狐トナツテ場上一ニ咆哮ス。太公望命ジテ「誰カワレニ代テ速ニコレヲ除ン。」殷郊跳出大音声ニテ、斧ヲフリアゲ狐ヲ斬テ三截トス。(卷之四)

姐己の美しさに圧倒され、周軍の誰もが姐己を討てないでいたが、太公望が「照魔の寶鏡」を姐己に向けてると「九尾金毛の狐」の正体が現れ、殷郊が躍り出て姐己の首を落とす。場面展開の「悪女成敗」と「妖狐の出現」との順序がそれぞれ異なるが、一幡丸と殷郊の形象は一致する。図版2に示したように、『画本武王軍談』も『通俗武王軍談』の殷郊が姐己を倒す設定を踏襲しており、馬琴の認識に『通俗武王軍談』からの影響が存していた。ちなみに『封神演義』で

姐己を始末する役目は姜子牙(太公望)が担っており、「子牙打一躬。請寶貝軛身。那寶貝連軛兩三軛。只見姐己頭落在塵埃。血濺滿地。」(子牙が一札をすると光が二三度回り、気がつく)と姐己の首はすでに地上に落ち、血があたり一面に広がっていた。第九十七回⁽²³⁾、「殺生石」とは様相が異なる。また、『封神演義』では紂王に実子は二人(殷郊と殷洪)おり、母親の姜皇后が殺された後は仙人の元で修行するが、『通俗武王軍談』では紂王の実子は殷郊一人で、姜皇后が死んだ後は姜皇后の弟姜文煥の元で姐己討伐の機会を待つ。

十六「頼家召安達景盛妾」に見られる「廿日庚戌。申剋以後。雷鳴甚雨。及三深更一月明。至曉鐘之期。中將家中野五郎能成。猥召景盛妾女。点二小笠原弥太郎宅。被居一置之。御寵愛殊以甚云々。」に由来している。⁽²⁴⁾頼家が景盛の「妾女」を召して寵愛すると書かれており、史実でも頼家が好色であることをよく表している記述といえる。だが、『吾妻鏡』の「妾」が「不義」に悩んで「自害」するといった記述は見受けられない。

「主君が家臣の妻に言い寄る」——「節を守って自害」という展開は、『封神演義』第三十回の紂王と賈氏との関係に見られる。紂王は臣下黄飛虎の妻である賈氏に戯れかかるが、「烈女」の賈氏は夫への貞節を守り、楼から自ら飛び降りて死ぬ（今日信蘇妲己之言。欺辱臣妻。昏君。……紂王大怒。命左右拿了。賈氏大喝曰。誰敢拿我。轉身一步。走近欄杆前。大叫曰。黃將軍妾身与你全其名節。……這夫人將身一跳。撞下樓台。粉骨碎身。」（妲己のいいなりになって、臣妻を侮辱するとは。」紂王は怒り、左右の者に「捕らえよ。」と命じた。賈氏は「誰が捕まるものか。」と叫び、欄干の前まで走り、そして「黄將軍、私はあなたへの名節を守って死にます。」と言って飛び降り、樓台の下で身を碎いた。）第三十回。

賈氏が夫への「名節」を守って自害した様相は、景盛の妻が「身の羞しめ」から逃れて景盛への節を守って自害する様と共通する。無論、これは本当に頼家が戯れかかったのではなく紫の方の謀略であり、その点で両書に差異はある。しかし『封神演義』でも、この場面で賈氏が美しいことを紂王に告げ、紂王の好色心を起こさせたのは他でもない妲己であり、狐が取り憑いた悪女の企みによって事件が起きたことが『殺生石』と通じている。『封神演義』の趣向と『吾妻鏡』との共通点、すなわち「好色な主君」と「家臣の妻妾」という点から、馬琴は両者を連想し重ね合わせたのではないだろうか。『殺生石』四編でも、「頼家卿の御事は色と酒よりいさきやうとに御過おんあやまちを重ねさせ給ふと雖たまた、桀紂の悪あくあるにもあらぬを」と記されており、頼家を暴君の代名詞である桀王及び紂王ほどひどくないとするものの、『殺生石』中に紂王の名前を出すことで、好色な頼家のイメージを形成しているよう。加えて、『殺生石』で妻が自害した後の景盛は、頼家を深く怨み、北条時政の命によって修禅寺で遊興していた頼家を攻め、幽囚させる役割を負う。一方の『封神演義』におけ

る賈氏の夫黄飛虎も、紂王の殷から離れて周に移り、太公望配下のもと、殷との戦で活躍するようになる。そしてこれらの要素は、『通俗武王軍談』には描かれない要素である。また、この賈氏の自害譚は後の馬琴長編読本『開巻驚奇俠客伝』(天保三「一八三二」―同六年刊、萩原広道執筆の第五集は嘉永二「一八四九」年刊)でも利用され、あるいは馬琴の自家菜籠中の趣向であったのかもしれない。

このように『殺生石』が依拠した「唐山小説」は、従来指摘された『封神演義』だけでなく、『通俗武王軍談』も含まれる。馬琴の『玄同放言』における考証が誤解を含んでいることは前述したが、馬琴の中では、『封神演義』や『通俗武王軍談』の閲読経験に加え、馬琴自らが『画本武王軍談』を執筆した経験も加わって、〈殷周革命〉を物語世界とした〈殷周革命説話〉という枠内で、『通俗武王軍談』や『封神演義』、さらには『玄同放言』の考証で用いた『史記』や『四子講徳論』、『山海経』、『下学集』などの諸資料が、それぞれ別の物ではなく、混在した形で存在していたと考えられる。そしてその「混在」が『殺生石』の全体構想での利用において発揮されたため、『殺生石』と主に『封神演義』とを比較した従来の研究では、最終局面の一致については見過ごされたのではないだろうか。

次節では、〈殷周革命説話〉の構想を基本に、馬琴が『殺生石』の物語をどのように構成したのかを見ていきたい。

三 『殺生石』構想と趣向の挿入

三―I 『殺生石』と「王昭君」の故事

さて、これまで『殺生石』の構想と〈殷周革命説話〉との関わりを述べてきたが、両者の関わりが強く認められない理由として、趣向における細かな相違もあげられると論者は考えている。例えば、麻生論考が指摘した共通点①の「美女を天下に求める」点をとりあげてみたい。

『殺生石』初編、源頼家は鎌倉幕府二代将軍でありながら好色な性格であり、世の中にいる美女を求める。しかし、

自分で探すわけにもいかなかったため、画師の「丹会法橋」を遣わして「諸国を遍歴」させ、土地土地にいる女性の姿絵を描かせ、その中から美女を選ぼうとする。その後の物語展開は、原文を引用すると甚だ長くなるため、以下の①から④にまとめることとする。

①「好色」な源頼家は全国の美女を求める。

②丹会なる画師を派遣し、全国の美女の姿絵を描かせる。

③他の女性は賄賂を払い美人に描いて貰うが、おむらは貧しいため賄賂を払えず、丹会に描いてもらえない。

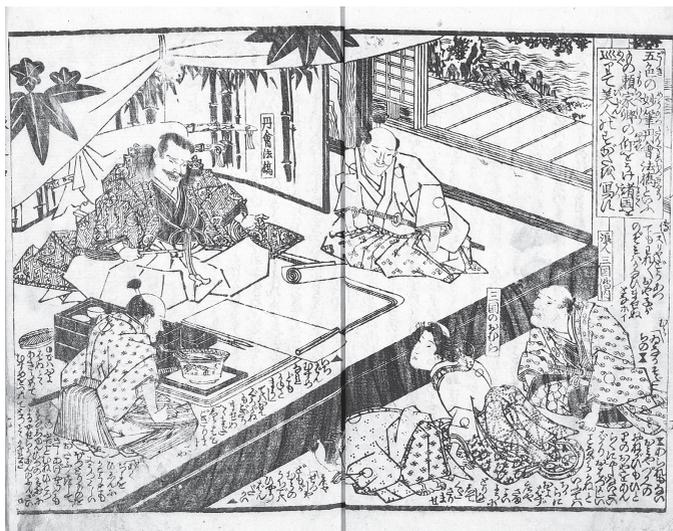
④おむらが自画像を描いたところ、殺生石から飛び出た妖狐がその絵を持ち去る。

⑤狐が持ち去った絵は頼家の元に行き、おむらの自画像を見た頼家はおむらを気にかけていたが、実際におむらを見るとその美しさに目を奪われる。

⑥賄賂の一件を知った頼家は丹会を処罰し、おむらは頼家の寵愛を受けるようになる。

ここで着目するのが、「画師に美女を描かせる」「画師が賄賂を求める」という点である(図版3)。基づいた〈殷周革命説話〉の展開はどうか。序盤の梗概をまとめてみる。

——殷の紂王は好色な為政者であり、臣下である蘇護の娘妲己が美しいと聞きつけ、彼女を後宮に入れるよう蘇護に命じる。蘇護は泣く泣く娘の妲己を連れて、殷の都朝歌に向かう。その途



図版3 『殺生石』初編上(6ウ・7才)(国文学研究資料館蔵)

次、宿泊した駅で姐己は九尾の妖狐に襲われて魂を奪われ、取り憑かれてしまう。狐が憑いた姐己は何事もなかったように後宮へと入り、その美しさから紂王の寵愛を一身に得て、紂王と共に様々な暴虐を働く。

この梗概については、『封神演義』と『通俗武王軍談』とで大差はない。したがって、麻生論考が述べた『殺生石』と殷周説話との共通点は、為政者が美女を求めると、その美女が妖狐に取り憑かれる点の二点に過ぎない。『殺生石』の展開⑥の画師の存在や、⑦の賄賂を払わないために絵を描いてもらえない、⑧の画師を為政者が処罰するなどの趣向は、〈殷周革命説話〉には看取できないのである。

さて、これら〈殷周革命説話〉に見られない『殺生石』の要素は、馬琴が作中に「昔漢の元帝とか聞えし天子は、後宮の女官多くて、悉く見がたしとて、その姿を描かせて、心に適ひし者のみ選みて召せし故事のあり」と明示するようになり、中国の王昭君の故事に拠るものと思われる。中国前漢の時代、元帝は後宮の女性の絵姿を描かせて気に入った女性を呼んでいたが、王昭君という女性は帝の寵愛を得られず、後に匈奴の単于に嫁ぐことになる。王昭君の名は早く中国の史書『後漢書』に確認できるが、王昭君が寵愛を得られない理由や匈奴に嫁ぐ契機となった事件は、『西京雜記』巻第二において付加される。その故事が日本に将来し、『今昔物語集』「震旦部」などに掲載されるようになった。

馬琴が直接依拠した資料について考察を加える。先に『今昔物語集』の書名をあげたが、『殺生石』執筆と近い時期(書翰の記述から文政四年頃に書き始めたと推測できる)の考証随筆『玄同放言』に引用された「今昔物語」の文章を見ると、馬琴の引用文と一致する本文を有する「今昔物語」は井澤長秀編纂『考訂今昔物語』(享保五「一七二〇」年刊)である。しかし、『考訂今昔物語』を確認するに王昭君の故事は収録されていない。一方で、馬琴は『西京雜記』を所蔵している(和刻本の『西京雜記』が元禄三「一六九〇」年に唐本屋又兵衛から刊行されているが、馬琴の「蔵書目録」には「華本合巻 一冊」とあり、華本を蔵した模様)。『西京雜記』の記述を以下に示す。⁽²⁸⁾

元帝後宮既多。不得常見。乃使画工図形。案図召幸之。諸宮人皆賂画工。多者十万。少者亦不減五万。独王嬪不肯。遂不得見。匈奴入朝。求美人为閼氏。於是上案図。以昭君行。及去召見貌为後宮第一。善应对。举止閑雅。帝

悔之而名籍已定。帝重信於外国。故不復更人。乃窮案其事。画工皆棄市。

(卷第二)

見たように、『西京雜記』の記述は簡素である。そこで、藤元元撰著『前太平記』卷第三の記事も記しておく。

(29)

昔漢朝^{コウカチウ}二。元帝^{ゲンテイ}ト申セシハ。後宮^{コウキウ}余多^{アタマニ}坐^{マシ}ユヘ。常^{ツネ}ニ悉^{コトク}見^ミル事ヲ得給ハズ。画工^{ガクウ}ニ命ジ。后^{コウ}妃^ヒノ姿ヲ似^ニ給^ヒニ書セ。按^アニ其^{コノ}凶^{キヨウ}。召^メテ幸^{サイ}シ給ヘリ。サレバ三千人^{ミヤウチ}ノ後宮^{コウキウ}。我^{ワガ}貌^{オモ}を好^{コト}書^カセントテ。彼^{カノ}毛延寿^{モウケンシュ}ニ様々^{サマサマ}ノ賂^ロシ。多^{オホキ}者^{モノ}ハ黄金^{オウゴン}十^{ジュウ}万^{マン}。雖^レ少^シ不^レ減^セニ五^ゴ万^{マン}。愛^{アイ}ニ良家^{リヤウカ}ノ女^メニ。王^{オウ}嬪^{ヒン}。字^ジハ昭^{シヤウ}君^{クン}ト申セシハ。三千^{ミヤウチ}第一^{ダイイチ}ノ美人^{メイジン}ナリ。我^{ワガ}姿^サノ勝^{カチ}レタルヲヤ憑^ヒレケン。彼^{カノ}画工^{ガクウ}ニ少^シモ賂^ロシ給ハズ。是^{コト}故^ユニ昭^{シヤウ}君^{クン}ノ貌^{オモ}ヲバ。一^{ヒト}際^{サカイ}醜^{ウシ}ク書^カ成^ニシケレバ。遂^ツニ帝^{テイ}ニ見^ミ給ハズ。馨^{キヨウ}香^{カウ}蘭^{ラン}麝^{シャ}徒^ニ消^ク。錦^{キン}帳^{テイ}紅^{コウ}衾^{キン}空^{クウ}ク朽^ク。独^{ヒトリ}燈^{トウ}火^カノ下^ノニ。滴^{ヒトリ}涙^{ナミダ}。明^{アカ}シ給^ヒケリ。其^{コノ}後^{ノチ}竟^{キヤウ}寧^{ネイ}元^{ゲン}年^{ネン}ニ。单^{ツル}于^ニトテ。胡^コ国^{クニ}ノ荒^{アラ}キ夷^イ入^ニ朝^{チウ}シテ。一^{ヒト}人^ニノ美^{メイ}女^{ニョ}ヲ求^{モト}メ。願^{ネガ}ハレ婿^{コウジン}ニ。漢^{カン}氏^シニ於^ニテ是^{コト}元^{ゲン}帝^{テイ}不^レ得^レ己^ニシテ。後^{ノチ}宮^{クウ}ノ中^ノノ劣^{レウ}レルヲリ給^ヒハントテ。件^{ケン}ノ似^ニ給^ヒヲ見^ミ給フニ。昭^{シヤウ}君^{クン}ガ凶^{キヨウ}勝^{カチ}ザリケレバ。則^ス是^{コト}ヲ行^ユシメント。单^{ツル}于^ニ約^{ヤク}シ給ケリ。既^スニ胡^コ国^{クニ}ニ行^ユク及^キデ。召^メテ貌^{オモ}ヲ見^ミ給フニ。其^{コノ}豊^{ホウ}容^{ユウ}靚^{セイヨク}飾^{シヨク}。恰^{アツカ}モ宮^{クウ}殿^{テン}ニ光^{ヒカ}リ晶^{ケイ}ク計^{ケイ}ニテ。最^{モト}後^{ノチ}宮^{クウ}第一^{ダイイチ}也^{ナリ}。帝^{テイ}甚^シ惜^シミ給ヘドモ。名^{メイ}籍^{キヤク}已^ニ定^{テイ}レリ。信^{シン}ヲ外^{ガイ}国^{クニ}ニ失^シハシテ。又^{マタ}他^ノ人^ヲモ更^カ給ハズ。無^{ナク}ニ是^{コト}非^ヒ遣^{ツカハ}シ給^ヒケリ。サレバ^①彼^{カノ}画^{ガク}工^ウ毛^{モウ}延^{ケン}寿^{シュ}。賂^ロニ耽^{タム}リ。昭^{シヤウ}君^{クン}ノ姿^サヲ偽^{イツ}シ故^ユ。遠^{エン}嶋^{トウ}ニ放^{ハナ}レキ。(卷第三、十八ウー十九ウ)

⑤毛延寿という画師を派遣して美女の似顔絵を描かせる、⑥王昭君は賄賂を払わないため醜く描かれる、⑦毛延寿は元帝に処罰される、など『殺生石』の特徴と共通する。賄賂を払わない理由(王昭君は自分の美しさに自信があり、おむらは貧しいため)や、⑧の自画像を描く様相がないこと、殺生石の妖狐が似顔絵を頼家のもとに運ぶなど、王昭君の故事とは差異もあるが、画師に似顔絵を描かせて美女を求める点、賄賂を払わないせいで似顔絵を描かれず寵愛を得られない点、画師が為政者に罰せられる点など、『殺生石』の要素は王昭君の故事を取り込んだと考えて良い。また、王昭君の容貌について『西京雜記』は特に記述がないものの、『殺生石』はおむらの容貌を「はなのかほばせ。月のまゆ。雪^{ゆき}のはだへはあら玉の。みが、できよきしなかつたに。人みな思はず見とれたり」(初編上、十一オ)としており、一致するとはいわれないものの、『前太平記』の記述「其^{コノ}豊^{ホウ}容^{ユウ}靚^{セイヨク}飾^{シヨク}。恰^{アツカ}モ宮^{クウ}殿^{テン}ニ光^{ヒカ}リ晶^{ケイ}ク計^{ケイ}ニテ」を思わせる。つまり、(般

『周革命説話』における「為政者」「後宮の多くの女性」「絶世の美女」という要素から王昭君の故事を連想し、紂王が好色な点や九尾の狐が憑依する点を残しつつ、〈殷周革命説話〉に王昭君の故事を混ぜ込んだと考えられるのではないか。単に『殺生石』冒頭場面に王昭君の故事を挿入した、という反論もあるが、そうでないことは、例えば、王昭君の故事では最終的に王昭君が他国に嫁ぐが、『殺生石』では狐が取り憑いた美女が好色な為政者の妻となっていることから、王昭君の故事の要素を採りつつも〈殷周革命説話〉の構想に則した変更が行われていると判断できよう。

『殺生石』はその冒頭から、〈殷周革命説話〉と王昭君の故事とを絡める重層的な物語生成が行われている。

三―II 『殺生石』と『日本霊異記』

次に、『殺生石』と『日本霊異記』との関連を取り上げる。その関連に至るまでの筋が少々入り組んでいるため、あらずしを説明しておきたい。

――頼家の寵愛を得た紫の方は、正妻の二色の方を陥れる。軍勢に攻められた二色の方は「子安観音」を飲み込み、頼家から預かった「源氏の白旗」で首を吊る。二色の方の弟上総太郎廣嗣は、妻の常夏、娘の一旗を連れ姉の元に向かうが、その途次、病んだ常夏の葉を求めて少し離れた隙に、弓平が常夏を殺害、一旗を奪い去る。紫の子浪子姫が頓死してしまい、赤子を奪って浪子姫として育てるためであった。廣嗣は妻の死骸を見て驚くが、その折、落雷した場所から赤子の泣く声が聞こえ、その場所に行くと二色の方の死骸から赤子が産まれていた。廣嗣は二色の方から生まれた御曹司を連れて母長濱の家に戻る。その折、長濱の元には蝮蛇枉六に追われた空蟬という女性が逃げ込んできた。長濱は空蟬を匿うが、枉六が長濱の家にいる廣嗣を訴人したため、喧騒の中で空蟬が攫われる。その際、空蟬は落馬して命を失ってしまう。廣嗣と長濱が空蟬を捜していると、一匹の狼が現れて近くの棺から女性の死骸を引きずり出した。すると「一個の鬼火」が現れ、女性の亡骸に入り込んだかと思うと蘇生する。その女性こそ空蟬であったが、廣嗣らに向かって自分は常夏であると主張する。驚いた廣嗣らはその理由を尋ねると、次のように説明される。

閻王宮へぞ参りける。其の時冥官詮議して閻魔王に申すやう、「南瞻部州、日本国鎌倉將軍頼家の旧家臣、上総太郎広嗣が妻常夏と呼ばれし者、……魂魄唯今参着せり。然るに臣等例に任せて司命の簿を閲し候ひしに、此は只一時の禍にて、命数未だ尽きざる者なり。如何計らひ候はん。」と申すを、閻王聞し召して、「命数尽きぬ者ならば、疾々娑婆へ帰せかし。」と仰せに、冥官、「さん候。此の常夏が撃れし時、初太刀に②深傷を負ふたるに、とどめを刺れて候へば、形體は既に破れたり。是によりて魄魂を復す便も候はず。」と、申す言葉も終らぬ折柄、南の方より紫の雲に乗りつゝ、観世音の冥府に影向在しく、閻魔王に宣ふやう、「此の常夏は命数尽きねど、形體の破れたるをもて、永く冥土に止めらるゝこともやと想ひしかば、地藏菩薩に問合せて、某自ら詣来たり。……此の常夏と等しき女子の空蟬といへる者、当年一十九歳にて、近き程に命数終らん。……願ふは件の空蟬の體軀を借りて、常夏が魂魄を復させ給へ。」

(二編下／廿九オー廿九ウ)

図版4で示したように、常夏が弓平に襲われて落命したため、「閻王宮」に赴いたところ、①「命数」が未だ尽きていないので現世に戻ろうとしたが、②「深傷」を負つており、魂が入る器がない。そのため、③常夏と「等しき女子」であり命数が尽きる空蟬の身体に常夏の魂を戻して蘇生させた、



図版4 『殺生石』二編下 (28ウ・29オ) (国文学研究資料館蔵)

という。

この『殺生石』の趣向もとある仏教説話に基づく。『日本靈異記』や『今昔物語集』などに所収されるが、前述した王昭君の故事と同様、本説話も馬琴が閲した『考訂今昔物語』には掲載されない。したがって、馬琴が目したのは『日本靈異記』と思われる。特に、『殺生石』執筆より少し前の文化九年に、馬琴は『日本靈異記』を書写・校正しており、それ以前の考証随筆『燕石雜志』(文化八年刊)では『日本靈異記』を考証に使用することはなかったが、文政初年の『玄同放言』では『靈異記』を考証の資料として用いていることから、この時期の馬琴は『靈異記』と密接であったことがわかる。要するに、文化末に『靈異記』を入手した馬琴は、文政期の考証随筆や小説の著述に『靈異記』を利用できる状態にあった。では、『靈異記』「閻羅王使鬼受所召人之饗而報恩 第廿五」を以下に示す。⁽¹⁾

讚岐国山田郡。有敷臣衣女。聖武天皇代衣女。忽得病。時備百味。祭門左右。賂於疫神而饗之也。「書込」此間有脱文「汝饗。故報汝恩。若有同姓同名人耶。衣女答言。同国鵜垂郡有同姓衣女。鬼率衣女經於鵜垂郡衣女之家而對面。即從緋囊出一尺鑿。而打立額。召將去。彼山田郡衣女。潜帰家也。時⁽¹⁾閻羅王待而校之言。此非召衣女。誤。

閻羅王待見而言。當是召衣女也。往彼⁽²⁾鵜垂郡衣女者。帰家經三日頃。焼失鵜垂郡衣女之身矣。更還愁於閻羅王白。失體無依。⁽³⁾時王問言。山田郡衣女之体。答言有之。王言得其為汝身。因為鵜垂郡衣女之身而甦言。即此非我家。我家者在鵜垂郡。父母言。汝者我子也。何故然言哉。衣女猶不聽。經於鵜垂郡衣女之家言。當此我家也。其父母言。汝非我之子燒棄。於此衣女具陳閻羅王詔狀。
(中卷第廿五)

(讚岐国山田郡に衣女なる女がいた。聖武天皇の御代、衣女が病気になるため、山海の珍珠を整えて門の両側に置き、疫病神に贈物をした。閻魔王の使いの鬼が来て衣女を召し出した。鬼は衣女を探して疲れており、供物を見ると媚びた仕草で食事を受けた。鬼は衣女に「そなたの御馳走を受けたから恩に報いよう。誰か同姓同名の者の心当たりはないか。」と言った。衣女は「鵜垂郡におります。」と答えた。鬼は鵜垂郡の衣女の家に行き、赤い袋から一尺の鑿を出して額に打ち立て、召し連れていった。⁽¹⁾時に閻魔王は衣女が来るのを待ち、取り調べて「これは召

し出した衣女ではない。山田郡の衣女を召し連れてこい。」と言った。鬼は隠しきれずに山田郡の衣女を召し連れてきた。閻魔王は「これが前に召し出した本当の衣女である。」と言った。^②先の鵜垂郡の衣女は許されて家に帰ると、既に三日経っており、家ではその体を火葬にしまつていた。再び閻魔王の元へ行き、「心を宿す体を残ってしまいました。」と訴えた。すると^③閻魔王は、「山田郡の衣女の体は残っているか。」とお聞きになつた。

「残っています。」と聞くと、「では、その体を取つてお前の体とせよ。」と命じられた。そのようなわけで、山田郡の衣女の体は鵜垂郡の衣女の体となつて生き返つた。そして、「ここは私の家ではありません。私の家は鵜垂郡にあります。」と言つた。父母は、「お前は私達の子だ。なぜそのようなことを言う。」と尋ねた。衣女はおも聞き入れず、鵜垂郡の家に行つて、「これがまさしく私の家です。」と言つた。その父母は、「お前は私達の子ではない。私の子は火葬にしまつたのだから。」と言つた。そこで衣女は、閻魔王の言葉を詳しく伝へた。

閻魔王の使いが死ぬはずであつた山田の郡の衣女に恩を受け、鵜垂の郡にいる同姓同名の女性を殺すことで、衣女の恩に報いる。しかし、衣女が閻王宮に行き、閻魔王が気づいたときには、鵜垂の郡の衣女の躰は火葬されていた。そこで閻魔王は、山田の郡の衣女の躰に鵜垂の郡の衣女の魂魄を入れて生き返らせる。以上が『靈異記』の概要であり、『殺生石後日怪談』の趣向と以下の三点、①命数の終えていない女性が死ぬ、②元の体が既にある、③違う女性の体に、魂魄を入れて復命させる、で共通することが諒解されよう。

さらにいえば、『靈異記』で衣女が住んでいた地が山田郡であるが、『殺生石』でもこの「山田」という地名が使用されている。常夏の魂が空蟬の身体に入る趣向の直前、空蟬が攫われたことがきっかけで廣嗣の正体（讒言により謀叛人とされた二色の方の弟）が露見したため、廣嗣と長濱は二人で石竹子村から逃げる。長濱の胸の中で眠る御曹司が目を覚ましてむつがる前に、二人は里に出ようと歩き続けるが森の中で迷う。その場面を詳しく見るに、「廣嗣は長濱を急がし立て、件くだんの森もりを立出たつ、山田の裾すそをあちこちと行けども、……いまだ人烟ひとごみ有る方かたに出いず」や「急いそぐ夜よるの道月みちづきを明あかりに五六町来ぬらんと思ふ程ほどに、山田の裾すそへ又出いたり。こゝは初はめの道みちならずや」とあるように、二人はなぜか「山

田の裾」から抜け出ることができない。そうこうしていると一匹の狼が現れ、棺から空蟬の死骸を引きずり出し……、後は前述した通りである。このように、女性の魂が入れ替わる展開が「山田」という地で起きることが強調される。

『靈異記』の山田郡は讃岐国、『殺生石』の山田の裾は下総国という違いがあり、また、『殺生石』では観世音の登場やそれぞれ登場人物の関係性に整合性を持たせる工夫が施されているものの、女性の魂が入れ替わる展開に加えて、地名の「山田」が共通することから、本場面が『靈異記』に依拠して描かれたと考える良い。

『通俗武王軍談』では、正室の姜皇后が妲己の讒言によつて死に、殷郊が姜文煥の元に身を寄せた後は、文王と太公望との邂逅にストーリーが移行しており、姜文煥の元で殷郊がどのように生活するかなどの様子は特に描かれない。しかし前述したように、『殺生石』ではその構想に変更を加え、貴種である頼家の御曹司を育てるために常夏は空蟬の身体を借り、寄生木と名を改めて現世に留まる物語を付加している。このことは、板坂則子「馬琴戯作における想像力の典型」⁽³²⁾が馬琴の黄表紙『小夜中山宵啼碑』(文化元年刊)に発する「死んだ妻が、その死後もなお夫の元に現れる」話型の一例として『殺生石』を取り上げ、「広嗣の妻・常夏は一度、殺されているが、もう一人の同年齢の女性・空蟬の体を得て生き返る。夫はそのことを不思議とせず、一緒に貴種の子である甥を育てていく。」と述べるごとく、「貴種」の子を育てるといふ重要な機能を有すると共に、後に浪子姫の正体(実は廣嗣と常夏の娘一旗)が判明するときの趣向に「血合わせ」(浪子姫と寄生木の血潮が一つになる)を用いて、交錯した因果を馬琴が描き出そうとしたことも一つの要因であろう。こういった重層的な趣向の利用に、馬琴の工夫が窺えるのである。

四 まとめと今後の課題

これまで述べてきたように、馬琴は『殺生石』序で『封神演義』を標榜してはいるものの、その内実は『封神演義』と共に『通俗武王軍談』の構想が利用されている。この重層的・輻輳的な利用が、『殺生石』の全体構想を『封神演

義」と断定しにくい原因となったのではないか。そしてその利用方法は、馬琴が『封神演義』と『通俗武王軍談』との関係を「誤解」したことに起因し、したがって『殺生石』の全体構想は、『封神演義』と『通俗武王軍談』とが混在した形、すなわち〈殷周革命説話〉に基づき成立していると考えられる。こういった複雑に錯綜する物語構想で、『殺生石』は貫かれていたのである。従来の『封神演義』単体を『殺生石』の構想としてきた見解は、完全な誤りではないものの、修正する必要がある。

さて、本稿では三編から始まる本筋と並行した佐介四郎孝常の物語や八重羽の雉子、身代わり観音譚、首実検、名詮自性など、『殺生石』に描かれる様々な趣向については触れなかった。それは、本稿の主旨である〈殷周革命説話〉の構想を軸に検証したところ、三・四編には〈殷周革命説話〉と関連すると思しき場面が看取できなかったためである。馬琴は三編序で「奈須野のはらの稿もなく、初編二編と綴りしより、はや六七年うち捨て、夜明けの幽霊見ることなく、立ち消したる筋なれば、後の趣向を忘れ、水だら／＼急に三編の催促」と述べており、初編二編と書き終えた後が長い期間空いており、構想していた「後の趣向」を忘れたと記している。仮に馬琴の言を信じれば、馬琴が〈殷周革命説話〉の構想を忘れ、したがって三編四編にその関連が見出せない可能性もある。しかし、五編のクライマックスで〈殷周革命説話〉の構想に戻ることを鑑みれば、三編序の記述は戯作の序文に見られる一種のポーズ（虚構）であり、合巻風仕立ての『殺生石』の読者層を見込み、当初の構想から離れた趣向重視の作品製作へと移行した可能性も考えられる。

ともあれ、『殺生石』は「多くの趣向を盛り込み、複雑な展開になっている」と評されるように、多種多様の趣向が嵌め込まれ、それらの全体構想から離れた趣向についての言及は未だ多くない。馬琴の物語制作手法を考える上でも、様々な問題を孕んでおり、一つ一つ検証していく必要がある。

例えば、文政十三年の序を有する『殺生石』第三編下で、仁田四郎忠常の息子である佐介四郎孝常が、家臣の津麦保太六と共に旅に出て、頼家の姫君浪子姫を捜す物語が描かれる。その流れの中で、「遠江なる小夜の中山」を通った

時、二人の猟師に襲われる。大事には至らなかつたが、後に二人の猟師は孝常の乳母であつた古葉の息子、雉子郎、雉子六の兄弟と判明する。二人の兄弟は頼家殺害の嫌疑がかかる孝常らを訴人しようとし、孝常を貶めるといふ不忠を行つたが、しかしこれらの悪事は、実はかつて根津甚平是行に退治された雉子の「悪霊」に取り憑かれたためであつた。

動物の悪霊が取り憑く点で、『殺生石』冒頭におけるおむらに取り憑いた九尾の妖狐と同様である。ともすれば、趣向の重複とも思われるが、この第三編の執筆が文政末ということから、数年後の天保六年に『八犬伝』において発表された馬琴の「稗史七則」が想起される。つまり七則の内の四「照応(照対)」、あるいは五「反對」であるが、得丸智子「曲亭馬琴の稗史法則——重複から照応へ——」³⁴⁾は「照応」「照対」「反對」を中心に考察を加え、天保三年の時点で「稗史七則」は出揃つており、さらに馬琴が趣向の類似を「対」として見る視点が現れていることを指摘している。では『殺生石』で「対」となるこれらの趣向がどのように紡がれたのか。

興味深いのが、本趣向が「小夜の中山」^{なかやま}で起こつたことである。(「小夜中山説話」は三位良政卿の雉子退治譚が著名であり、馬琴も中編読本『石言遺響』(文化二年刊)でその話を用いる。前掲板坂論考が指摘した「死んだ妻が、その死後もなお夫の元に現れる」という「小夜中山説話」の話型との関係を踏まえた時、場面展開のディテールは本稿で指摘したごとく『靈異記』の説話に拠るものの、『靈異記』(女性の魂が入れ替わり蘇生) ↓ 「小夜中山説話」(死んだ妻が再び夫の元に戻る) ↓ 「小夜中山説話」(良政の雉子退治譚) という連想の下、さらに『殺生石』の構想である「股周革命説話」(妖狐の憑依) と「動物の悪霊」という共通項から「根津甚平説話」(雉子退治譚) の八重羽の雉子を登場させた、という過程を想定することはできないか。そしてその連想に、同一作品中における「対」となる趣向を描き出すという小説様式上の工夫が、馬琴の念頭にあつたのではないだろうか。

本作におけるこういった趣向のさらなる考察が、課題として残る。

注

- (1) 柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』（八木書店）に拠る。以下の引用も同様である。
- (2) 向井信夫『殺生石』と山口屋について（『江戸文藝叢話』、八木書店、一九九五年五月）に詳しい。
- (3) 高木元「末期の中本型読本——いわゆる〈切附本〉について——」（『江戸読本の研究——十九世紀小説様式攷——』（ぺりかん社、一九九五年十月）。
- (4) 注(3)高木論考が、「第二編以降は四十丁を二分冊した合巻仕立てで刊行し続けられたが、五編で完結するまで板面の体裁は折衷様式のままであった。これを普通の合巻と呼ぶには、やはり躊躇せざるを得ない」と述べている。
- (5) 『殺生石後日怪談』の本文は国文学研究資料館蔵本（五編十冊）に拠った。ただし、本文の漢字変換に際して家庭絵本文庫『殺生石後日怪談』（国書刊行会文芸部編輯、国書刊行会、一九一八年一月）を参照した。
- (6) 注(2)に同じ。
- (7) 注(2)向井論考。また水野稔「馬琴の長篇合巻」（『江戸小説論叢』中央公論社、一九七四年十一月）や、板坂則子「馬琴戯作における想像力の典型」（『曲亭馬琴の世界——戯作とその周縁——』、笠間書院、二〇一〇年二月）が、『殺生石』単体ではないものの言及している。
- (8) 麻生磯次「江戸文学と中国文学」（三省堂、一九四六年五月）。
- (9) 注(7)水野論考や『日本古典文学大辞典』（岩波書店）の「殺生石後日怪談」の項（水野稔氏執筆）において、『殺生石』が『封神演義』の構成を借りているとしている。
- (10) 『玄同放言』の本文は同志社大学図書館蔵本（大本二集三卷六冊）に拠る。
- (11) 写本で流通する実録『悪狐三国伝』があり、また『絵本三国妖婦伝』（高井蘭山作、文化元年刊）や『絵本玉藻譚』（岡田玉山作、文化二年刊）などが刊行されており、当時は三国の妖狐の系譜はある程度流布していた。
- (12) 水野稔「馬琴の長編合巻」（注(7)前掲書）を参考にした。
- (13) 『画本武王軍談』（国立国会図書館蔵本、半紙本十卷五冊〔合二冊〕）に拠る。
- (14) 『通俗列国志前編』（架蔵本、大本二十四卷譜系一卷二十冊）に拠る。
- (15) 『燕石雑志』（架蔵本、大本五卷六冊）に拠る。

- (16) 『燕石雜志』の記述「唐山演義の書」について、田川くに子「玉藻伝説と『武王伐紂平話』」(『文芸論叢』11、一九七五年三月)は『武王伐紂平話』とし、信田純一「鞏輯口絵の構造」(『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』、岩波書店、二〇〇四年九月)は『封神演義』とする。また、『昔語質屋庫』の記述「唐土演義の書」についても、『馬琴中編読本集成』(『解題』(徳田武氏執筆)は『封神演義』としてゐる。『武王伐紂平話』は世界の中でも日本の内閣文庫に一本しか残存していない稀少資料であり、馬琴が目したとは考えにくい。また本論でも述べているように、『燕石雜志』執筆時期に『封神演義』を閲していた可能性は低い。ただし、文化末から文政初年の『玄同放言』執筆時点で『封神演義』を閲していたことは間違いない。文化十一年刊『八犬伝』の序盤に『封神演義』が利用されているという服部仁「八犬伝』典拠小考——『八犬伝』の伝單を検証して易姓革命に及ぶ——」(『曲亭馬琴の文学域』、若草書房、一九九七年十一月)の指摘がある。論者も『八犬伝』と『封神演義』(『通俗武王軍談』)とを比較・検証したが、『通俗武王軍談』には「鳩」の要素が介在せず、服部論考の指摘した『封神演義』との共通点を踏まえると、両書の関連を認めて良い。つまり、馬琴が『封神演義』を落筆したのは、『燕石雜志』『哀雜の記』執筆以降、『八犬伝』著述以前とある程度限定できるのではないだろうか。想像をたくましくすれば、『玄同放言』卷之三上「宋陳彭年綽号」における「後人武王軍談に縁りて。褒姒を妲己に作りかえしは。なか／＼にわろし。抑、九尾狐の事。前板燕石雜志にいひしは。疎漏なり。寔に無益の弁なれども。童子の夜話を資んとて。かさねてこゝに考す。」の記述は、『燕石雜志』執筆後に『封神演義』を得たため、改めて『玄同放言』で考証を加えたのではないだろうか。
- (17) 『弓張月』の本文は日本古典文学大系60『椿説弓張月』(岩波書店)に拠る。
- (18) 服部仁「馬琴所蔵本目録(一)——翻刻『著作堂俳書目録』並に『曲亭蔵書目録』——」(『馬琴研究資料集成』、クレス出版、二〇〇七年六月。初出は『同朋大学論叢』40、一九七九年六月)を参照した。以下も同様。
- (19) 『弓張月』頭注(後藤丹治校注)は、十二朝一開闢演義、武王—東周列国志、漢楚—両漢演義、玄宗—隋唐演義、元明—雲合奇蹤、のように、すべて「原書」の華本をあげている。
- (20) 二階堂善弘『封神演義の世界』(大修館書店、一九九八年十一月)。
- (21) このことは大高洋司「曲亭馬琴と『武王軍談』」(『日本語文化研究』4、二〇一一年九月)も触れる。
- (22) 注(20)に同じ。
- (23) 国立国会図書館蔵『新刻鍾伯敬先生批評封神演義』に拠る。以下、同様。引用の際、旧漢字は新漢字に改めた。後ろに付した現代語訳は「完訳 封神演義①②③」(光栄、一九九五年一月—三月)を参照し、適宜、論者が改めた。

(24) 『吾妻鏡』の本文は『新訂増補国史大系』(吉川弘文館、二〇〇〇年三月)に拠る。

(25) 三宅宏幸『開巻驚奇俠客伝』論——『封神演義』『通俗武王軍談』との関連を中心に——(『日本文学』59—2、二〇一〇年二月)が、『俠客伝』の信夫と『封神演義』の賈氏との関連を指摘している。

(26) 注(21)前掲大高論考が、『画本武王軍談』制作を通じての『通俗武王軍談』の消化・吸収の上に、漢籍類・白話小説『封神演義』の閲読結果が重なっているものであり、典拠論としてそのどれかを強調するよりも、渾然として『武王軍談』に拠っていると云った方が、実態に近いのではないかと考える次第である」と、馬琴の中で「渾然」とした『武王軍談』が存することを述べている。ただし、『武王軍談』という名称では、『通俗武王軍談』『画本武王軍談』の印象が強いため、本稿では『封神演義』やその他史書における中国故事も含む目的もあり、〈殷周革命説話〉と題した。

(27) 『昔語質屋庫』執筆時に馬琴が用いた『今昔物語』が『考訂今昔物語』であることは、大高洋司「文化七、八年の馬琴——考証と説本——」(『説話論集』④ 近世の説話、清文堂出版、一九九五年一月)や三宅宏幸『椿説弓張月』典拠小考(『同志社国文学』74、二〇一一年三月)でも触れられているが、『殺生石』執筆と最も近い時期に執筆した考証随筆『玄同放言』の記述(左記の比較表を参照)を見ても、馬琴が引用した『今昔物語』が『考訂今昔物語』であることが確認できる。

『玄同放言』第三十一人事	『考訂今昔物語』卷第二十四第五条	『今昔物語集』卷第十一 (実践女子大学蔵写本)
今昔物語「割註」卷廿四第五条云。今はむかし。何れのとときにや。帝。大和高市郡に造営したまふに。国内の夫を催して。その役とす。しかるに夫とともに中に。仙人仙人とよぶものありけり。行事官の輩あやしみて。汝等何によりて。かれを仙人とよぶぞと問は。夫のものこたえていはく。このものは。久米とまうす。(卷之三上)	今はむかし。何れのとときにや。帝大和高市郡に造営したまふに。国内の夫を催して其役とす。しかるに夫共の中に。仙人くよぶ者あり。行事官輩あやしみて汝等何によつて。かれを仙人とよぶぞと問。夫の者こたえていはく。此者は久米とまうす。	然る間、久米の仙、其の女と夫妻としてある間、天皇、其の国の高市の郡に都を造り給ふに、国内に夫を催してその役とす。然るに、久米其の夫に催され出でぬ。余の夫ども、久米を「仙人、仙人」と呼ぶ。行事官の輩ありて、これを聞きて言はく、「汝ら、何によりて彼れを仙人と呼ぶぞ。」と。

(28) 『西京雜記』世説新語(台湾商務印書館、一九六五年八月)所収「縮印安傳氏雙鑑樓藏明刻本」に拠る。

(29) 『前太平記』は早稲田大学図書館蔵本(刊年不明、古典籍総合データベース)に拠る。なお、『前太平記』の本文を適宜略しながら挿

絵を加えた『前太平記図会』(秋里離島作・西村中和画、享和三「二八〇三」年序)が刊行されるが、本作では王昭君の故事は省かれている。また、文化年間に『唐物語』(賀茂季鷹校正、文化六年刊)、『唐物語提要』(清水浜臣校正、文化六年刊)が刊行されており、王昭君の故事が載る(服部仁氏御教示)。両書の本文に大きな違いはないため、ここでは前者の該当箇所を引用すると、以下の通りである(早稲田大学図書館蔵本、古典籍総合データベースに拠る。論者翻刻。適宜句読点と濁点を付した)。

むかし漢の元帝と申す御門おはしませり。三千人の女御きさぎのなかに王昭君ときこゆるひとなん、はなやかなることはだれにもすぐれたまへりけるを、この人みかどにまちかくむつれつかうまつらば、われらさだめてもの、かずならじとあまたの御心にいやましくおぼしけり。この時にえびすの王なりけるものまいりて申さく、三千人までさふらひあひ給へる女御きさぎ、いづれにてもひとりたまはらんとまをすに、うへみづから御覧じつくさん事もわづらひありければ、そのかたちを画にかきて見給ふに、人のをしへにやありけん、この王昭君のかたちをなん見にくきさまになむうつしたりければ、えびすの王給ひてよろこびひらけつ、我くにへぐして帰るに、ふるさとをこふる涙はみちの露にもまさり、なれし人々にたちわかれぬるなげきはしげきみやまの行末はるかなり。かゝるまゝにはたゞねをのみなげども、なにかひかはあるべき。うき世ぞとかつはしるゝはかなくもかゞみのかげをたのみけるかな。あはれをしらずなきけふかゝらぬものゝふなれども、らうたきすがたにめで、かしづきうやまふ事その国のいとなみにもすぎたり。かゝれどもふりにしみやこをたちわかれにしよりにまにいたるまで、うれへのなみだかわくまもなし。この人はかゞみのかげのくもりなきをのみたのみて、ひとの心にごれるをしらず。

(末、五十四才—五十五才)

これを見ると、絵師に賄賂を渡す渡さないの記述がない点で、やはり『殺生石』に近いのは『前太平記』の記述と思われる。

- (30) 『靈異記』に関する記述は、『燕石雜志』の段階では「静慮按、水鏡の説は日本靈異記に出たり。」(二九 柘刀祢 九尾附)のように、知友静慮子からの教示に拠るが、『文同放言』になると「靈異記下巻第十一に、当_三帝_三姫阿倍天皇代_三云々といふ事あれば」(第三十 一人事「久米仙人」とあるように、馬琴自身が『靈異記』を直接読んでいたことがわかる。このことは、つとに小泉道「馬琴と『日本靈異記』——多和文庫本を中心に——」(『愛媛国文研究』22、一九七二年十二月)が指摘する。

- (31) 馬琴旧蔵の『日本靈異記』(文化九年に校正、多和文庫蔵。国文学研究資料館マイクロフィルム)に拠る。後ろに付した現代語訳は、中田祝夫訳注『日本靈異記』(講談社、一九九〇年三月)を参考にした。

- (33) 注(7)前掲板坂論考。

- (34) 得九智子「曲亭馬琴の神史法則——重複から照応へ——」(『国語国文』61—5、一九九二年五月)。馬琴の「神史七則」に関して

は、他にも濱田啓介「馬琴の所謂稗史七法則について」（『国語国文』28—8、一九五九年八月）、板坂則子「稗史七則」発表を巡って（注（7）前掲書所収、初出は「国語と国文学」55—11、一九七八年十一月）、徳田武「馬琴の稗史七法則と毛声山の「読三国志法」——『侠客伝』に即して「隠微」を論ず——」（『日本近世小説と中国小説』、青裳堂書店、一九八七年五月。初出は「文学」48—6・7、一九八〇年六—七月）、柴田光彦「批評する馬琴——八犬伝八輯下帙答評と稗史七則——」（『解釈と教材の研究』31—2、一九八六年二月）などの研究がある。

附記

資料の図版掲載を許可して下さいました国立国会図書館、国文学研究資料館に深謝致します。